

頭部外傷後遷延性意識障害患者の気道閉塞に対するスリープスプリントの効果

¹自動車事故対策機構 岡山療護センター 脳神経外科、

²自動車事故対策機構 岡山療護センター 精神神経科、

³自動車事故対策機構 岡山療護センター リハビリテーション部、

⁴自動車事故対策機構 岡山療護センター 看護部、⁵近藤歯科クリニック

○本田 千穂¹、吉田 英統²、衣笠 和孜¹、藤原 洋子³、本多 和成³、平元 美由紀⁴、成清 治子⁴、松村 望東美⁴、近藤 康弘⁵

【はじめに】外傷による意識障害患者では、受傷直後から筋緊張亢進が長期に及ぶことがしばしばある。特に口腔周囲の咀嚼筋群や表情筋の過緊張が長期に及ぶと、歯列が狭窄し、下顎前歯は内側に傾斜して上顎前歯は突出し、相対的に下顎が後退する。その結果、開咬状態になるだけでなく閉塞型睡眠時無呼吸患者(以下OSAS)と同様に舌根沈下から気道が閉塞する傾向があり、通常は気管切開で対応せざるを得ない。今回、OSASに応用されているスリープスプリント(以下SS)を日中に長時間装着できるよう緩衝型に改良し、呼吸障害を改善する試みを行った。

【症例】16歳、女性。交通事故によるびまん性軸索損傷で、両側減圧開頭、気管切開等の急性期治療を受け、救命はされたが重度の意識障害が遷延し、除脳硬直状態が続いた。受傷11ヶ月後に完全植物症状態で当院転院。気管カニューレを抜去しても気管切開口は開存したままで、舌根沈下による咽頭の閉塞に伴う吸気性呼吸障害のため、気管口閉鎖練習は困難であった。舌根沈下は下顎の後退によるものと考えられたため、SSを作成した。

【結果】SSの装着により、下顎は約1cm前方に挙上でき、装着していないときに比べて、XP、CTで明らかに咽頭部の気道が拡がった。吸気音も改善して、気管口閉鎖時にも酸素飽和度が低下することがなくなった。

【考察】SSは遷延性意識障害患者の下顎後退による気道閉塞の改善に有用と考えられた。意識障害患者ではSSの装着感について十分な意思表示が得られないため、口腔粘膜の状態などを十分に観察し、SSの微調整を繰り返す必要があった。また、装着に慣れるまで唾液の誤嚥が増える傾向があり、注意が必要と思われた。